

チームメンバーの生産的な側面を出し、 チームパフォーマンスを向上させる条件

—人格タイプと8つの人間特性の影響—

張 琳

本論文では、坂本ゼミで実践活動を通じて、「チームメンバーの生産的な側面を出させ、チームパフォーマンスを向上させる」条件を論じていく。

まずは、第一章は坂本ゼミの概要で、坂本ゼミの目的と活動内容を説明する。会議と個人ワークの繰り返し替えの中で、指導教授が定義した8つの人間特性を身に着ける。

第一節の「ゼミの目的」は、8つの特性の柔軟に切り替えることで、チームパフォーマンスを向上させることである。

第二節の「ゼミの活動内容」で、レギュラー活動と非レギュラーを説明する。非レギュラー活動の主な形として介入活動がある。介入活動は上級生が下級生のゼミ活動に介入して下級生のパフォーマンスを上げることを目的とする。第二章と第三章で取り扱った事例は全部介入活動の事例である。

次に、第二章は、マコビーが主張した人格タイプがどのように個人の8つの人間特性に影響したのかを説明する。さらに、私が属したチームの事例を通じて、チームパフォーマンスが高いチームの前提条件を論じる。

第一節の「人格タイプと8つの人間特性の関係について」で、四つの人格タイプの長所と短所を分析し、8つの人間特性との対応関係を論じた。

第二節の「人格タイプがチームパフォーマンスに影響した事例」で、両チームのチームパフォーマンスを比較することで、チームメンバーの人格タイプがどのようなコンビネーションで、チームパフォーマンスが高いのかがわかる。

第三章は一番比重を置いた箇所、「IM (Individual Memory) インディビジュアルメモリ」から「TM (Transactive Memory) トランザクティブメモリー」への構築プロセスを説明する。「IMが生産されなかった」「生産されたIMがTMに構築されなかった」「生産されたIMがTMに構築された」という状況の三つの事例を通じ、「IMを生産した段階 (個人ワーク)」「IMからTMに変換した段階 (会議)」という二つの段階で、チームパフォーマンスを向上させる必要な条件を論じていく。

第一節の「Individual MemoryとTransactive Memory」で、IMからTMへの構築プロセスを説明する。すなわち、個人の考え (IM) がどのように他のチームメンバーに共有され、チームの決定 (TM) になるのかを説明する。この過程で、プロセスロス (PL) とプロセスゲイン (PG) も生まれる。IMの集合からPGを足して、PLを引いて、最終的にTMになる ($IM - PL + PG = TM$)。TMを構築するためには、PLを最小化し、PGを最大化する必要がある。IMは個人ワークの段階で生産され、会議の段階でTMに構築される。

第二節の「Individual Memoryが生産されなかった事例」で、坂本ゼミ生2人の個人ワークと会議での表現を比較することで、「個人ワークでのIM生産」が「会議でのTM構築」にどのように影響するのかわかる。その中の1人が、個人ワークの段階で、8つの特性を発揮できず、IMが生産されなかったことから、会議でのTM構築に影響が出た。TPを向上させる第一条件はこの節で例証される。

第三節の「Individual MemoryがTransactive Memoryとして構築されなかった事例」では、チームメ

ンバーは個人ワークの段階でIMを生産したが、会議の段階で、8つの特性を柔軟に切り替えることができなく、最終的にTMに構築されなかった事例を扱う。

第四節の「Individual MemoryがTransactive Memoryとして構築された事例」で、チームメンバーは個人ワークの段階で、IMを生産し、会議の段階で8つの特性を柔軟に切り替えることもでき、最終的にTMに構築された事例を取り扱う。

これら第三節と第四節を通じて、TPを向上させる第二条件と第三条件を例証する。

最後に、結論で、チームパフォーマンスを向上させる三条件の関係を論じていく。